

RUWV 山小屋建設に至る揺籃前期

39 年卒 鈴木正博

1961 年(昭和 36 年)3 月末から 4 月にかけて、旧人合宿が積雪期の大峰、山上が岳、弥山縦走として行われた。吉野口から入山、山上が岳の宿坊で泊まり、翌早朝から行者還岳經由弥山への縦走であり、日陰はほとんどアイスバーン状態、結局 12 時間行程になってしまったが、その最大難関は弥山の登りであり、トウヒやシラベの純林が積雪で倒され、その上に雪が被さっていたので、私達は四つん這いになって登っていくほかなかった。先行者が登ると、その後を後続者が登る。しかし、一歩登ると脚がブスツとヒバの枝の中に突っ込み、これを抜くと反対側の脚がまた落とし穴に落ちる感じで、結局四つん這い状態の登山となった。私達は、団体装備のテントや食料を背負っていたので、かなりの重量となり、早朝からのトラバースと 12 時間の長時間行程で疲労困憊、やっとの思いで弥山の小屋にたどり着いた。1 年先輩の 2 回生数人は翌朝頂上付近を散策した時、林の中の V 字通路でピッケルの革ケースとボックス型二眼レンズのカメラが落ちているのを拾ったことがあった。ひょっとして遭難者の落し物かと話し合ったりしたものです。

そして翌日は、深仙の宿まで南下し、役の行者と不動尊を祀るお堂と 10 人ばかり入れる無人の避難小屋があり、ここは水場が問題で、釈迦のお臍からチョロチョロ流れ出る水があるだけ。その大岩の割れ目にタオルを当てて、一箇所に誘導して、長時間かけてやっとの思いで団体の晩御飯をこしらえたのに、その夜半に大雨があり、冬用のウインパに入っていた者が濁流に流されそうになり、急遽全員が避難小屋に逃げたことがあった。

しかし、朝方には雨も止み、上級生は前鬼口に予定通り下山していった。私達新人 7,8 人は、団体用の食料が残ったので、一晚残留して、喰っちゃ寝の自由をさせて欲しいと願い出て、上級生の了解を取り付けて沈殿した。当時は、50 本入りのピースの缶入り煙草が貴重品であって、トランプやゲームで煙草の 1, 2 本を取りあつた。しかし、その煙草がなくなると、マッチ棒の先に吸殻を突き刺して、やけどしないように最後まで吸ったりしたものだ。このことがあってから後、山へ煙管を持ち歩くようになった。このような食べては駄弁ることの繰り返しをしている時に、「こんな山小屋が自分達にあればいいなー。」との発言があつて、語り合ったことがある。

続いて、私達が 2 回生の 5 月の GW 期に、比良山望武小屋での新人合宿終了後、また団体の食料が余ったので、2 回生 10 人余が残留して、食べて寝て、また食べることを繰り返している時、ここでも「自分達が自由に使える山小屋が欲しいなー。」との願望を話し合ったことがあります。

このような漠とした望み、夢物語がその 5 月下旬の衣笠理工学部における総会の議題になったのですが、

1. 現在の保有するテントと、鍋等の団体装備では、收容能力が少ない。
2. 1 箇所に留まるのではなく、各地を渡り歩くのがワングルの本旨だ。

とすることで反対する一部早期論者を押さえて、即時建設が大勢を占めることとなりました。現在の山小屋が誕生するに至った一過程を具体的に披露させていただきました。

[上記の文章は、畑中 健君の漂雲 RUWV 掲示板[136]2005.08.31 に掲載したものの転載です。さらに付言すると、2007 年 3 月 18 日の座談会で本人が発言したのですが、深仙小屋で、初めに「このような小屋があればいいな。」と言ったのは、39 年卒の柴 弘一君であることが判明しました。]

【…………以下に、2020年3月29日(日)追記させていただきます。(鈴木正博)】

今一つの、RUWV山小屋竣工の原動力となったパワー(精力)を記す必要があります。
山小屋ワーク等で昭和46年～平成4年卒の皆さんが使われている「超OB」の存在です。

「漂雲45th山小屋特集号」2007年平成19年8月1日発行 11,12頁の 昭和37年卒 永辻啓介さん『北山荘が「最初の一撃」』に書かれているように、クラブ創部3名の中の一人、鎌田克則さんが管理・運営メンバーの「北山荘」に再々行くようになり、しかし、客人であって、心理的な遠慮があり、「将来自分達の山小屋を持ちたい」という願望をひめられていた。このように、「超OB」グループと、当時の2回生グループが、「自分達の山小屋を持ちたい」と言う願望を抱いていた。

当時の大学は、人文、社会科学部は広小路の本校学舎、理工学部が衣笠学舎に別れていて、同好会だから当然のこと部室もない。そこで、ほぼ1ヶ月おきぐらいにリーダー会が総会と称する検討・討論会を、本校と衣笠学舎で交代に開催していた。

議論が紛糾すると先の「超OB」グループが大声で反対意見等を遮断する等、私達2回生になったばかりのニューフェイスは、総会に出席するのは、恐ろしい議論の場に立ち会わされる覚悟を要した。

ところが、その総会で京都大学のワングルが、比良山のへく谷にブロック建てのちゃちな小屋を建てたと、ピンぼけ写真を見せられたこと。更に、何回目かの総会で鉄筋ブロック造りの山小屋の青写真を見せられ、その材料費が14万円であると発表されたことから、これなら私達でも手が届くのではないかとの思いから、「自分達の山小屋造り」が実現に向けて進行していった。

……………以上のことから、私はRUWV山小屋が誕生した原動力の両翼であったと考えています。

2017年3月に現役会員の2回生に向けて、昭和39年卒業のOB鈴木正博さんが講演される機会がありました。その講演のための元原稿に、会の創設や山小屋建設の経緯が詳しく記録されていますので、ホームページ用に編集して掲載させていただきます。 <事務局>

山小屋建設の経緯、理念、当時の様子など

平成28年3月31日 S39年卒 鈴木 正博

【1】 RUWV初期の卒業名簿（途中退部、幽霊会員は含まない）からみた各年代の人数の推移

RUWVは1956年（昭和31年）4月27日（金）法学部に入学した間なしの1回生鎌田克則、大野照夫、福島俊平の3人が相談して、ワンゲル会員募集のビラ4,000枚を広小路学舎でばら撒き、ポスター10枚を構内に張った。正午から研心館のベンチで受付が始まった。続々と申込者があって、3日目には100名足らずの新入部員となった。

鴨沂高校山岳部員だった鎌田、福島先輩と、同校の生物部部員だった大野先輩が、当時関東の大学で始まっていたワンダーフォーゲル活動をしようということになり、「体力はいらない、誰でも参加できる、野山を歩いて一切危険なことはない。団体による規制はなく、好きなことができる。好きな者の集まりであって、勉学ともかち合わず、金もかからない同好の集まりである。」と言うのが、設立当時のセールストークなり、イメージだった。

100名近く応募してきてくれた人達と、次の日曜日4月29日奥比叡登山に連れて行った。そして5月の連休には、保津峡、ポンポン山に案内した。夏には妙高高原にキャンピングした。

この夏ごろには常連メンバーと称する20名ほどが中核となって、クラブの基礎が出来上がってきた。当時の常連は入学間なしの1回生の永辻啓介、本所明夫、西野正紀等の先輩面々である。

鎌田先輩が記録された「立命wv創立小史」から判明することは、RUWV創立の日から数日後には、会員が100人前後居たということになる。そして20名程度の一回生の中堅会員がリードして会活動を始めた。その中に、永辻、本所、西野さんが居り、創立者3名を加えた1回生が常連メンバーの中心だったと考えます。

ここで、卒業名簿トップに居られる鎌田先輩より3年上の、31年卒業の平山

浩さんがどのような活動をされていて、RUWV第一期の卒業生となったのかについて、私には判りませんが、彼の高校は三重県の四日市高校で、私の卒業した高校の先輩にあたります。そこで私は10年ほど前に一度自宅を訪ねて行ったのですが、既に亡くなって居られ、時計屋さんの店も畳んで郊外に転居されていました。しかし、家族の人に聞いたところ彼の息子二人は、早稲田と同志社のワングルに所属していたそうです。

本日は、創業者や、スタートダッシュのリーダーだった鎌田、永辻先輩が居られるのに私が出しゃばるのも変ですが、ここでRUWV設立時点以降初期の現役の会員数を見て見ますと、31年卒から34年卒までの4学年合計では20名、その後35年入学生が5人、36年も5人、37年が17人、38年がやっと19人。ところが、39年卒は38人、40年卒も38人、41年卒が27人です。したがって創立時の4学年が20人規模であるのに、山小屋建設時点での4学年合計は122人、つまり6倍の多人数であるという事実をご記憶ください。

ここで時計の針を7年進めて現在に近づけます。

漂雲第4号は1963年昭和38年4月15日に発行されました。この号に私が書いた「山小屋建設経過報告」9ページが掲載されました。その後、漂雲第20号にも転載され、更に2007年平成19年8月1日発行の山小屋建設45周年 記念特集号の「漂雲」にも孫転載されています。本日はこれらの内容が私の話の中心となります。

その、記念特集号の座談会で同級生の柴君が、当時の漂雲第4号の編集責任者だったのですが、「僕は漂雲第4号を編集していて、その前の第3号の編集責任者大原さんの時の会員数と、僕がやり出してからの会員数は大幅に増えました。だから何部印刷したら良いのか良く判らなかつた。」と言っています。それだけ幽霊会員も交じっていたということです。

しかし、同じ座談会で私達の時代のチーフリーダーだった湯浅君が発言していますが、「部費の滞納が3カ月続くと退部という規定はあったが、しばらくの間使わなかつた。それは、幽霊会員も歓迎していた。部費や山小屋建設特別資金さえ払ってくれたら結構という考えで、山小屋建設のための特別徴収金、一人当たり500円徴収という点でもドル箱だった。」集められるだけ集金しようとの考えでした。しかし、一方では、「スポーツ店、学校等の援助を仰がず。」を声高に発言し、かつ結果も初志を貫徹できました。

この当時書かれた資料には、山小屋建設時点でのワングル現役会員数は、175人や178人在籍していたと書き残しています。これを裏付けるものとして、1963年昭和38年3月31日付のRUWV山小屋会計の収支をみると、理工山小屋

代 17,700円、本校山小屋代 57,500円 合計 75,200円が入金されています。これは山小屋建設のために各会員からは「500円特別徴収する。」ことになった特別会計であり、逆算すると確実に150人の会員から500円を徴収していることが判ります。（20人強は幽霊会員だったのでしょうか。）つまり、創立時点でも100人ほどが一時的に在籍していたが、卒業時点では20人規模となり、山小屋建設時点でも170人規模現役会員が居たが、卒業時点では122人ということになります。途中退部者や幽霊会員の浮動票は常にあったということです。さらに言えば、これらの122人は山小屋建設の中核メンバーとは言えません。卒業時点まで在籍していて、ワングル活動を続けていた人たちということです。

【2】 自分達の山小屋を持ちたいという願望、それは2つの流れがあった！

A) 永辻先輩グループの流れ

昭和31年創部発起人3人と100人弱の入部会員の中で、夏頃までに中核メンバー20人ほどが形成されていった。その中に永辻、本所、西野先輩あたりがリードして積極的に活動されていた。そのパートワンデリングの一つが、鎌田先輩のリードで、鎌田、福島先輩が自分達 鴨沂高校山岳部員として使っていた芦生峠から徒歩1時間の「北山荘」に永辻先輩達を 昭和31年の秋に連れて行かれた。“煙い小屋でも小金の御殿・・・”とダークダックスが唄っていた「雪山讃歌」、この唄は南極第一次越冬隊長だった西堀栄三郎氏が設置された山小屋で、この北山荘をイメージして作詞されたと言い伝えられている歌であって、その伝統ある山小屋は、現在は鴨沂・洛北高校山岳部が共同で使用管理されている無人小屋だが、誰もが宿泊できる山小屋ということで、永辻先輩達は再々利用されていて、自分達の仲間内で一緒に飲み食いして、かつ唄い人生を語り合っって仲間の絆を深められていったと私は想像しています。

この無人小屋は中央に炉が切っており、煮炊きや暖をとるのに薪をくべるが、上手に火を燃やさないで煙で燻されて戸外に出る羽目になる。それがまた楽しくて何回か通っているうちに、現役山岳部員や府立一中のOBで有名な山岳会員達と交流する機会があったが、所詮、客人であることに変わりなく、心理的に遠慮の気持ちがあった。そのことから、将来自分達の山小屋を持ちたいという願望が芽生えて行った。この事実から、永辻先輩は自分たちで山小屋を持ちたいという「最初の一撃」はこの北山荘での体験であると述懐され、そのことを山小屋特集号に記載されています。

ここでちょっと脱線しますが、この永辻先輩は、鎌田先輩と同じ昭和31年の入学だと思われませんが、法学の勉強をこよなく愛されて、私が入学した昭和35年

時点でも現役学生でした。多分37、38年頃まで学生生活を謳歌されたと思います。このほか、大野先輩はこれまた鎌田先輩と一緒に創部3人衆の一人ですが、法学部を卒業後理工学部の土木科に学士入学された人で、第一次山小屋建設委員長をされるほど、昭和35年頃（36年5月？）の理工学部があった衣笠学舎での総会で、大声で山小屋建設の提案説明をされ、反対意見にはアジ演説で応酬されました。今一人、K.Hさんも学士入学で学生生活を楽しんでいましたが、山小屋建設反対論者であって、「山小屋建設なんてとても無理、阿呆なこと言うな。建ったら河原町通りを逆立ちして歩いてやる。」とほざかれたことを今でも印象的に記憶していると大野さんは特集号に書かれています。

当時、ワングルの総会は、広小路と衣笠に分かれていたので、交互に毎月開催されていて、一種の全員集会、討論会の様相を帯びて居ました。そのような雰囲気の中で、①装備が十分でない。②会費など知れたもので、山小屋よりもっと装備を充実する方が先だ。③ワンダーフォーゲルと言うのは本来漂泊することなのに、一か所に定着するのはおかしいという考えで、反対される先輩が多く居られた。

ところが、俗に言う「永辻学級」と言うのがあって、永辻先輩の実家は、北野千本で風呂屋さんだったと思うのですが、理工学部の衣笠に近いことから、理工学部の現役が良く集まって、人生を語り、世相を論壇、議論喧しくされていた。その永辻先輩には「はじめの一撃」があって、永辻、大野、それに打越、森村先輩あたりが反対意見にどやしつけるような大声でアジられて、【きれいな言葉で言うと】自分達の山小屋を持ちたいと意見表明され続けました。

B) 39年卒の中心メンバーによる流れ

今ひとつ、ここでも時計の針を5年進めて現在に近づいてください。

私達39年卒が入部してきたのが昭和35年、2～4回生の合計人数を上回る新入部員が加入してきて、上級生が鍛え甲斐を感じられたのでしょう、一生懸命教えてくれました。調子に乗った私達も同期のよしみで仲間内の絆を育成しました。夏の北アルプス雲ノ平の集中登山や白馬山麓のスキー合宿を楽しみ、1961年昭和36年3月の旧人合宿“大峰山縦走して熊野に下る”途中の深仙の宿で、食糧がたっぷり残ったので、一回生の常連が全部もらって一泊余分に沈殿した。この深仙の宿は水場がなく、合宿中はタオルを岩の割れ目に押し込んで、これを一か所に導いて、一滴一滴のしずくを集めて炊事や飲料水にして居たのに、合宿中のその晩に大雨が降ってきて、テントが浸水したので狭い避難小屋に逃げ込みました。

そのように良い印象ではなかったが、上級生が居なくなった気楽さから、10人ほどか、食っちゃ寝を繰り返し、「シケモク」を回し喫煙して、駄弁っていた。

いずれもフィルターのない両切りのひかりや、しんせいもあったが、当時は湿気に強い、50本の缶入りピースが最高で、トランプ等のかけの商品に1本2本とやり取りしていた。それがなくなると、灰皿に残っている吸殻を、マッチの軸にさして、最後まで吸っていた。

そんなときに、柴君が「こんな山小屋が自分達のものだったらいいなー。」と言ったのに、皆が同じ思いを持った。

続いて私達が2回生の5月、GWに2泊3日の新人合宿が比良山の望武小屋で行われた。その時も団体食糧が余ったので、2回生10人ばかりが余分に一泊して駄弁リングを楽しんだ。ここでも「こんな山小屋があったらいいなー」という話になった。

【3】 山小屋建設の機運

いよいよ山小屋建設の話に入りますが、まだ手前のドタバタが続きます。

上記のような山小屋が欲しいと言う2方向からの願望を受けて、1961年昭和36年5月下旬の理工学部、衣笠での総会で、大野照夫さんを長とする第一次山小屋委員会が誕生しました。

この7人会は主として山小屋建設のクラブ内意気高揚と資金調達を行い、比良山の八雲ヶ原に散在する空き缶・空き瓶を集めてくず屋に売って資金稼ぎしようとしたが、リフトで纏めて下界に持って降りようとしたが、江若鉄道の協力が得られずに、穴を掘って埋めるだけでした。

7月14～17日には妙高高原にPRワンデリングをしましたが、2,3万円しか儲かりませんでした。続く9月の総会で、同級生の木村君の姉さんが委員会の意見を入れた山小屋の青写真第1号を発表しました。

これに対して、時期尚早論者から「土地決定が先決ではないか？」と質問されましたが、この青写真はその後も委員会の意見を入れて以後4回修正発表されました。

同じく頃 衣笠の総会で京大のワングルが、比良のヘク谷にブロック建ての山小屋を作ったという話が飛び込んできて、ピンボケの写真1枚を見せられました。一方、何回目かの設計図作成の過程で、純粋資材費を積算したら14万円だと言われたので、この金額なら僕らの手の届く数字だと前向きにとらえる機運が生まれてきました。

10月に入ってRUWV役員が改選されて、委員長を木村君とする第二次山小屋委員会が再編されました。主に、建設予定地を探すことに重点を置き、趣味登等に聞きに行きました。そこで、二の谷、八丁平、芹生銀座、岩屋不動、愛宕山の裏、芦火谷の6候補地が話題に上り、また総会で審議されました。

その結果、①近くって簡単に入れる。②花背でスキーができる。③ハイカーに比較的荒らされていない。④水の便が良い。以上の理由から、二の谷の現在地に決定した。そこで12月に入り、芹生の有力者前田専太郎さんを紹介してもらい、加えて、二の谷の土地台帳を閲覧するために周山の地方事務所へ行った。その時初めて二の谷の所有者が物部新三郎さんと判り、下旬に物部宅第一回目の訪問をした。新三郎さんが不在だったが、父親の玄助さん、奥さん、おばあさんから土地借用の承諾を得た。ところが早や花背には雪の便りが聞かれ、土地の問題は春まで持ち越しになった。

そこで、資金面が当面の課題として浮上ってきてこれの解決策として、第3回PRスキーが計画実行された。なぜ我々がPRするのかの議論もあったが、昭和37年2月14～18日にかけて、見事160名の一般学生を白馬山麓蕨平スキー場へ20人程で引率して、14万円稼ぎました。

昭和37年 3月10日、大阪梅新のアポロでリーダー会を持ち、その時予定地が森林法の保安林内、それも規制の強い「水源涵養目的」であることが発表された。続く3月13日京都西陣のマリヤでリーダー会が開催され、その場で鈴木を長とする第三次山小屋委員会が設定され、翌14日、鈴木以下6名で物部新三郎さんに面会「こちらの線に沿って土地を貸してもらえる」ことになった。二の谷ならどこでも好きな場所と言うことであった。しかしながら、「植林期なので契約は4月まで待ってくれ、けれど工事は着工しても良い」との言葉ももらった。そのため、花背の物部宅を引き上げ、残雪の点在する二の谷の予定地へ調査に行った。

そこは、南東にゆるく傾斜した所で、真南に空間があるのみ。奥深い山の中に居るような感じを受けた。しかし、積雪40センチ余も有り、3月25日からの第一期工事ができるのかどうか心配したものである。とにかくベランダをできるだけ広く取りたいので、隈笹と雪が覆っている斜面を登って7×4mの4隅に人を配置して、私は木の上に登ってA案、B案、C案を検討して、東の法面を盛り土ではない、削ったところとして、それより奥に建設するC案を採用した。その分、隈笹が覆っている斜面を削る範囲が広がったが、削った土石を前に出してベランダを広く確保することとした。結果、雑木二本を切り倒すことになった。

【4】 工事着工 基礎工事

昭和37年3月25日から4月15日まで、例年実施していた旧人合宿を振り替えて、5班に分けて第一次建設作業を実施した。第一班は31名投入、先輩も3人参加された。この日の早朝には、大阪からオート三輪自動車鉄骨を運んだが、

芹生峠の下でダンプカーが川に後輪を取られて前進を阻まれ、テントサイトに着いたのが遅く、今後の方針を検討するだけで終わった。

26日の翌日朝は前夜来の雪に見舞われ、テント場は積雪3cm「近代工事は道造りから」と言うわけで、橋造りを主として、芹生までの下流と、予定地までの上流コースに分かれて作業を開始、昼前にまた降雪、そのために作業を一時中止した。

翌27日には地鎮祭抜きの山小屋予定地斜面を削るドカチンを開始した。ベランダを広く取りたかったので、いちばん深いところは7m余り掘ることになった。掘削作業は、ツルハシで掘り起こし、スコップ隊がモッコに載せて前の斜面に引きずり出すのだが、段取りが悪く、バケツに入れて手送りで土石の運搬をした。

28日には、岩盤の一角が顔を出した。調子の出た元気者がツルハシで根気よく割にかかる。

道具としてはそれしかないので、根気よく続けるしか方法がなかった。しかし、慣れない仕事のため、三日目ごろからは足腰が痛く、休む回数が増えてきた。

29日夕方第2班16人が到着、バトンタッチが行われる。この日、芹生の前田さんのトラックを借りて、資材を購入、セメント30袋、続いてバラス、砂5合ずつを芹生の広場に一時蔵置した。

この芹生部落には民家8軒のほかに、小学校の分教場があった。芹生銀座ルートと花背ルートの交点に広場があり、ここが建設予定地に運びあげる資材置き場とし、再々活用した。この資材置き場は山道1時間のボッカ作業のスタート起点でした。現在は三の谷出合い迄車の道路が拡幅されて、車の進入が可能となっており、ボッカ作業も半分以下の労力で運びあげることが出来ます。

54年前は木馬道と言われる丸太と雑木をはしご状に組んだものが登山道や谷の橋渡しとして北山一帯に設置されていました。檜や杉の用材を切り出してトラックが通る道路まで、櫓のようなものに乗せ、丸太そのものをワイヤーで引きずりおろす装置として敷設されていました。この木馬道の上を歩かざるを得ず、時々滑ったり、ボキンと折れたりして、痛い目にあいました。

予定地では次第に土石がうず高く積まれ、ひろいベランダが確保されるようになり、またこの班によって切り倒しが予定されていた雑木2本がベランダの端に移植され、根付くようにせっせと水をかけて世話をしました。

31日に私は、法学部の民法の助教授の研究室を訪ねて、森林法第34条に関して意見を求めた。先生はやはり学校内のことなので「良かれ悪しかれ、とにかく事務所へ届けるべきである。」と言われたので、4月2日に京都府庁林務

課へ問い合わせに行った。そこで「保安林の中でも水源涵養林に関しては、最終的には府庁へ回ってくるが、許可については地方事務所長の権限だから、京北事務所へ「保安林内（山小屋）建設作業許可申請書」を提出せよと指導された。クラブ内では、事後処理で良いが支持されていたので、板挟みになっただけをとるべきか迷った。

4月2日には第3班20人が到着、1班から継続して作業に従事する者もいた。この班の作業で、バラス、砂が芹生の資材置き場に到着しているので、ドカチンとボッカを並行して行うことになった。ボッカでは、はじめは要領が悪く、静脈が腫れ、手が紫色に変色する事態まで引き起こった。

5日快晴、朝食前にボッカ2回を樹立する者が出た。

6日物部新三郎氏と借地契約書を取り交わした。（新三郎さんは書類に残すことを躊躇されている様子だったが、「学校に提出する必要がある」の殺し文句を使った。）

夕刻第4班27名が到着、基礎コンクリート用の溝掘りとボッカを併用する。ボッカも数日続けると、スコップ7杯がスタンダード、10～12杯がスペシャル、14、15杯はスーパーと言う規定が生まれた。

予定では、4班をもって終了するのだが、休暇もまだ残っており、仕事量も山積していることから、10日より15日まで、10名の者が残って、溝掘り、ボッカが続けられた。

そして15日は、作業打ち切りと第1回借地料として年間1500円を支払いに行く予定であった。ところが私鉄24時間ストにあい、上賀茂から3名はヒッチと徒歩で花背へ向かった。未だ溝には凸凹があるが、次はコンクリート打ちの段階までこぎつけた。

これで、第一期作業、延べ人員400名を終了し、以後は土、日曜日を利用して入山する方式に転換した。

【5】 基礎コン打ち

4月24日のリーダー会で、「保安林内山小屋建設作業許可書」提出は、小屋完成の時まで待ち、落成後事後処理として行うとの意向が打ち出された。28、29日18名が測量用材木をボッカ、そしてクイ打ち完了、更に、基礎コンの高さにタコ糸を張り巡らす。その際、永辻、安田先輩の助言を得て、31日奥村、鈴木で周山に向かった。明るく梅デーの朝、京北事務所保安林係の吉田技官に実情を話した結果、申請書の提出に踏み切り、書式を写して1時からの本校で開かれていた総会で報告した。そこで、早速提出書類の作成にかかり、新たに物部さんより土地の使用承諾書ももらって、5月4日の新人合宿中に、奥村さんに

周山へ飛んでもらった。(この辺のことは、特集号に「幻の周山への道」と題して寄稿してもらった、発端となった理由である。)

新人合宿後、5日より6日にかけて、32名の参加を得て、ブロックのボッカを始めた。この日一日で500kgの鉄骨は無くなった。また、雨だれ岩を穿つ の例えのごとく450個のブロックが、残り227個になった。

5月12, 13日5名の土木部隊により、基礎コン打ちの為、鉄骨組みを行う。

5月18~20日の間、大学創立記念日を利用して、47名が木枠造りとコンクリート打ちを行う。コンクリートは立ち上がりを除く基礎部分を打ち終える。何しる初めてコンクリートを流すと言うので、立ち上がりの鉄骨から、凹地内の仮枠の位置まで、ひいては1袋50kg のセメントボッカから、配合比まで慎重を期した。それでも鉄骨が立ち並んだ光景は、えも言われぬ気分であった。

5月25~27日まで、24名が立ち上がり残部のコンクリート打ちにかかる。27日はあいにくの雨天、しかしながら、予定より大分遅れているので、雨を衝いての作業を実行した。ある者はパンツ一つとなり、ある者は藁背負子を背中に、腰には犬の尻皮を反対に当てたスタイル、また、他の者はステテコ姿と言う具合である。はじめ作業をしていると身体も温まるのだが、昼過ぎに雨がパンツまで通り、動いていても寒いという悪戦苦闘の場面を展開した。御蔭で、コンクリートは水を沢山含んだから、上部は綺麗にならされた。しかしながら、明るる月曜日は3名が風邪をひいて学校を休む結果となった。

6月4日、「5月31日付京都府指令第499号」をもって「保安林内山小屋建設作業申請書」の許可を受け取った。

かくして、作業は公権力で保証されたが、既に梅雨期に入っており、4週間土・日曜日が雨でたたかれ、先の27日を含めて、5週間連続作業中止を食らった。

【6】 ブロック積み

6月23, 24日10名が入って、木枠はずし及びモルタルで基礎コンの上部を水平にする。

7月3日 本校での総会において、夏山合宿前に山小屋作業に入山することが可決された。

7日より16日まで、延べ116名の参加で、ブロック9段を積み終える。

8日の朝、前夜運んできておいたセメントを使い、南西のコーナーに礎石設定、39cm幅のブロックに1cm幅のモルタルを餡子にする計算である。上の方はタコ糸を張っているので一応何とかかなった。しかし、横に17個のブロック

となると、最後の北西コーナーが3cmほど不足する。これは、餡子のモルタルの量が多くなって1cmを超えた結果だ。そこで、はじめの4個を残して、一度積んだブロックを落としてやり直す。それでも1cm程基礎コンの立ち上がりコンクリート横幅に比べ窮屈なようだが、基礎コンのぎりぎりまで使ってOKとする。事の起こりがこの妥協にあったとは知らずに、2段目で修正するからいいや、と言うことになって、最終的には9段目で上手くやればいいやという発言まで出るなどしながら9段、1, 8mの高さのブロックが積みあがった。このブロック積みでは、基礎コンから立ち上がった鉄骨とブロックを並べていく際の、穴の位置が合わず、ブロックのうち側の穴を割って広げる作業も増えた。また、捨てコンの地面位置から、基礎コンの立ち上がりが60cm、ブロック9段の高さが180cm、合計2m40cmの内側の高さがあったが、足場を組んでなかったため、ブロック積みは軽業師さながらの作業となった。

【7】 臥梁設定

施工過程最大の難関がこれである。ボッカ作業が依然残っているとはいえ、作業は遅々として進まず、基礎コン打ちの仮枠設営から推察すると、ブロック9段の上に仮枠を設営するのは至難の業である。まず、足場の設営が困難で、次に、ブロックの上に乗るコンクリートの重量を支える土台を要し、等々を素人が考えると全てが難問である。そこへ、私の中学時代の友人で日大の建築科の3人が実習に関西に来ているのを幸いに、1日山へ招待して彼らの意見を聞いた。丸太を使った足場の設営や、上部のブロックの両サイドに板を立てて、ワイヤーで引っ張って、あるいは最近だったらボルトを入れて、そのままコンクリートを流し込んで埋め込んでしまう。「埋め殺し」「はめ殺し」をする。また、四隅の臥梁のところは、支える土台を作らないといけない。このようなことが判らず、結局「これは大工を入れるしかない」と言うことになった。

9月中旬、倉橋君が島田工務店に相談した。臥梁の木材、仮枠組み、足場を含めた屋根の上棟の請負契約の見積もりをもらったら合計金額が235,480円だった。ところが、湯浅君が大工を知っているという話が出てきて、島田工務店との契約を一時ストップした。だけど、具体案が出て来ない。見積もりが出て来ないので、やむなく島田工務店と再度交渉して、僕らがボッカしたり、手伝ったりするということで、最終的に出てきた見積もり額は、168,844円、この金額は、一般会計を投入しても私達の山小屋特別会計の手持ち資金では不足する。そこで、10万円は申し訳ないが3月末の支払いにして欲しいと言うことにして、臥梁設営、屋根の工事を再開した。

10月6, 7日58名でバラス、砂各トラック3杯目をボッカ、本所、安田先

輩が来られた。

10月11日見積書点検の末、工務店へ行き、品目一つひとつの説明を聞き、契約書を取り交わした。

10月12～14日14名が入ったが、またまた難問が発生。と言うのは、貴船、芹生間の道路を改築しており、トラックは通行止め。その為、材木は花背から寺山峠越えとなった。しかし、以後のボッカに表面切って文句を言う者が居なかったのが助かった。

13日早朝、花背スキー場の下って、大工及び仮枠用材木を現場に運びあげた。午後4時前、不満やるかたなし。と言うのは、仮枠の難しいコーナー4か所を残して大工が帰ってしまった。来週にはコンクリートを打ちたいと計画していたところなのに。

14日は貴船-芹生間の道路工事施工者に、地藏さん前の一時仮置きしていたバラスを使われているとの情報が入ったので、早速、太田建設と掛け合って、5000円の弁償額を受け取り、残りのバラスを前田の小型車を借りて、芹生の荷物置き場へ運んだ。

これと前後して、臥梁用に都合17袋のセメント及びバラスのモルタル用に4袋のセメントを追加購入した。

10月16日総会が定足数に満たず、集会となる。その場で、葉書による参加勧誘を行った。これに対してリーダー会内部で動揺が見られた。

10月20日、大工3人入山、臥梁仮枠が完成、42名で21日臥梁仮枠内部にコンクリートを打ち終えた。立ち上がりボルトの位置が若干食い違ったところが生じたが、材木の穴の位置を調整したら良く、大ごとではない。

【8】 上棟

10月27、28日38名と本所、永辻先輩が参加。前日現役2人に花背の材木置き場で盗難防止の見張りをしてもらい、日曜日1日で建具類を除いた全量の材木を運び終えた。

11月2日 2人に相乗りを頼んで、大工5人が入山、見る見るうちに棟上げをなし、東側の屋根板まで打ち終えた。

10月3日、昨夜来の雨にテントが浸水し、炭焼き小屋に避難した。1日中閉じ込められたので、sが雨を衝いて芹生部落まで酒を買い（分けてもらう）に行った。

10月4日 8時起床、テントサイトに移動、本所、高塚先輩が来られた。窓枠のところへコンクリートを埋め込む作業を行った。昼前、前田の息子が様子を見に来た。

10月5日 大工3人が続けて入り、屋根の残り、床及び建具の取り付けにか

かった。この日に曇に見舞われたと言って大工が文句を並べた。

10月6日 島田工務店の事務所へ午後6時前に行って、出し忘れていた祝儀を渡し、棟梁に細部の注文をした。

10月11, 12日 7名が入り、1階床板が基礎コンの上に来るように、大工の修繕具合を監視してもらう。

10月17, 18日 18名が入り、セメント4袋をボッカ、屋根にはベンガラ色のペンキを米田さんに塗ってもらい、南面のモルタル塗り1回目を完了した。

10月22～25日 18名がローソクを灯して小屋で夕食をとった。北面モルタル塗り、芹生のセメント6袋ボッカ、土間にグリ石を敷く。更に、南面2回目のモルタル塗りを行い、屋根の残り窓や屋根の白木にペンキを塗った。

11月29日 ストープの件で永辻先輩の自宅に10名が押し掛けた。OBから寄贈を受けることになっていたが、特別注文しなければならず、時間がかかるので既製の薄手のストープを購入することになった。

11月30日 学校ストでリーダー会開かれず、方針不明。

12月1, 2日 2回生が山小屋でコンパを催した。その前に北面に2回目のモルタルを塗り、2日の昼までに足場に使った丸太を花背まで運んでくれるように駄目押しをした。そのようにして無理やり日曜日に自動車を出させ、ドア、梯子等を運びあげた。

【9】 完成の日

12月3日 ストープ店に行くと、別注の件は、今年中に出来かねると言うことが判った。これで応急用を必要とするにいたった。

12月9日山小屋落成式。前日よりランプとストープが入り、20名余が明日に備える用意をした。

当日昼前にやってきた者も加えて、それに、多くのことでお世話になった芹生の前田専太郎さんを迎え、OBでは本所さんがこられ、総勢33名でささやかなお祝いを挙行した。何かの事由でこの日参加できなかった会員と、小屋の晴れ姿を思い浮かべて、それぞれが感慨を抱いたであろうと思う。

この日の最大の喜びは、「ここに自分達の山小屋ができた。」と言うことである。

それに加えて、末川 博総長より「青山迎人新」の漢詩を贈ってもらったことが挙げられる。

12月12日「保安林内山小屋建設作業完了届出書」を京北事務所へ送達した。

12月14日 島田工務店へ68,844円を支払う。

昭和38年3月15日支払い猶予を願っていた10万円を支払った。

【結びにかえて】

鎌田、大野、永辻先輩方は、戦前派に属し、国民学校生生活をされている方々と言うのは、戦争でどん底生活を体験されていて、敗戦後10年、廃墟から立ち直ってきたそれまでの実生活の大変さと、一方では、末川 博総長の“未来を信じ、未来に生きよ”と言う強いメッセージを受けて、戦争は絶対にしてはならないという信念がおります。

当時私は永辻さんからピカソのゲルニカの絵が、戦争の悲惨さを象徴していると言って再々聞かされたことがあります。

私は5年後ですが、一応戦前生まれです。しかし、幼少の頃で0歳から4歳までの出来事であって、ほとんど記憶にありません。唯一、京都市内に住んでいて、田んぼの畦でイナゴをとってきて、一升瓶に入れて糞を出し、母に佃煮にしてもらって食べたことがあります。いわゆる戦後の食糧難を象徴する体験をしてきたわけです。がしかし、今では福島や長野県に行くとイナゴの佃煮や、蜂の子などが、酒のあてとして高価な土産品となって販売されています。

ちょっと脱線してしまいましたが、私達39年卒業生には、5歳上の永辻さんが現役でおられるのが、普通はおかしいのです。と言うのか、大野照夫さんや河合 一さんは、法学部を卒業されて再度理工学部で学士入学されていたのですが、永辻さんは法学部に在籍されて居心地が良かったのでしょうか、確か、私の1年前に卒業されたのではないかと記憶しています。この創立当初からRUWVのことをご存じで、北山荘が気に入って再々足を運ばれた、それが自分達の山小屋が欲しいと言う願望の最初の一撃となった。この体験は、後から入ってくる者に、RUWV現役の最上級生として、一目も、二目も置く存在だったし、本人もドスの利いたダミ声で、クラブの運営や世相、人生を語るとき、「ヤンレーやなあー」とドスの利いた低音で、議論をさえぎって、持論を展開される。反対意見が続こうものなら、「やかましー、とっとと出なおして顔でも洗ってきな」等とヤジ演説が始まる。

RUWV創立から6、7年は現役クラブの重鎮として、存在感を示しておられました。一種の生き字引的存在でした。

このように、かなり度胸のあるおっさん、永辻先輩でも鴨沂・洛北高校山岳部現役、OBや元の所有者の京都府立一中のOBと北山荘で同宿することとなった時には、「所詮客人で、心理的に遠慮の気持ちがあったことは否めない。そして、それが、将来自分達の山小屋を持ちたいと言う願望に結びついた。」

これが永辻先輩の言われるところの「山小屋が欲しい。」という気持ちの“最初の一撃”である。

これに、私たち39年卒の集団も2度の山行から「自分達の山小屋が欲しい。」との思いが呼応して推進力となり、私達の3回生が、新2回生、1回生を巻き込んで、100人強の大集団が役割分担して、春、夏休みと土・日曜日を利用した入山で、半年余で作り上げた山小屋の成果、果実であると考えています。ここまで聴いて（見て）いただいた皆様は、いかがが想われましたでしょうか？